きずな

第21号

2022年11月

＜発　行＞
泉南市人権啓発推進協議会

バックナンバーはこちら →

人権週間 市民の集い

令和3年１２月５日（日）、文化ホールで、人権週間「市民の集い」を開催しました。第一部では、社会学者の神原文子さんに、本市の人権意識調査の分析結果を踏まえながら講演いただきました。第二部では、黒人ジャズピアニストと黒人に対して差別意識を持つ白人運転手の2人が一緒に旅をしていく中で、心を通わせ、友情を深めていく姿を描いた映画「グリーンブック」を上映しました。
当日ご参加いただいた方に、感想をいただきました。

すごく良い気分で終わった映画だった。タイトルの『グリーンブックとは何？』と思ったので調べた。それは、黒人専用の旅行ガイドブックで、彼ら専用のホテル・レストラン・ガソリンスタンド等が書いてある。上映中にもクローズアップされていた。

演奏ツアー中、お互いの性格・黒人への不条理を知る中で、次第に密に交わるようになった二人のやりとりに、感動する場面が多くあった。一番胸が込み上げた場面があった。黒人のシャーリーが白人のレストランでの食事を拒否され、やむなく黒人専用のレストランに行く。そこで、ピアノを弾くことになる。その楽しそうな様子。あたかも店全体が陽気に歌い出したようだ。彼の弾くピアノの音色も白人達のコンサートでのそれとは、全く違う。「自分は、誰にも負けない才能を持っているんだ」という自負や、自分自身が作った壁も、吹き飛んでしまい、体全体を動かす笑顔のシャーリーがいた。黒人も白人もないのだ。

人の間違った見方を変えるには、お互いの意識変革だと思う。第三者的にずっと見ていれば、平行線をたどってしまう。お互いを認め、理解し合うには、真の交流が大切である。互いの強さ・弱さを知り合い、思いあってこそ、意識変革ができることを、この映画は教えてくれた。

（雄信校区　向井　惠子）

＜参加者の声＞

◆決めつけずに歩み寄ることで信頼関係が生まれるんだと思いました。

◆人との交流が大切なことが講演・映画を通じて理解できました。

◆今日のような催しを増やしていただければ、多くの方の意識が変わると思います。

人権週間 みんなのカフェ

１２月１２日（日）、人権作品展の会場であるイオンモールりんくう泉南イオンホールで、シルキーサウンズデュオさんによる「みんなのカフェコンサート」を開催しました。

コロナ禍での疲れや落ち込みがちな気持ちを、音楽の力で癒し、少しでも晴れやかな気持ちになればという思いで実施した今回のコンサート。

子どもたちの人権作品に囲まれた会場は満席で、子どもからお年寄りまで多くの方に参加していただきました。コンサートでは、素敵なメロディーと、軽快なトークが披露され、参加された方々には、日常の喧騒から離れたゆったりとした時間を過ごしていただけたのではないかと思います。

＜参加者の声＞

◆年末になっても、コロナ禍で暗い話題が多い中「みんなのカフェ」の懐かしく美しいサウンドに癒されました。

◆親子で参加しました。間近で子どもに聴かせることができ、とてもいい体験になりました。

◆コンサートの中で自分の子どもの作品を見に来られた方々、本当に事前に人権学習（本来人が持っている気持ち）ができたと思いました。

◆久しぶりに音楽を生で楽しむことができ、すてきな時間でした。

人権協総会・講演会

5月29日、会員並びに来賓の方々の出席のもと、令和4年度の総会を開催しました。昨年行いました様々な事業を報告した後、本年度の活動計画・予算案・新役員体制が承認されました。総会後の記念講演に参加された方に寄稿いただきました。

5月29日（日）泉南市人権啓発推進協議会の総会が行われ、総会終了後、東京パラリンピック視覚障害者柔道の競技に出場した松本義和さんの「エンジョイライフ／楽しく生きやな損！」の講演がありました。

真っ白な上着、真っ赤なズボン。パラリンピックのユニフォーム姿で講演を行った松本さん。講演の途中で披露されたシドニーパラリンピックで獲得した銅メダルは思ったより大きく見えました。

講演は次のようなお話で、高校時代から視力障害者になり、その後気持ちが沈んだこと、視覚障害者の施設で障害を受け入れたこと、鍼灸の資格を取るために通った盲学校での柔道との出会い、その後の柔道人生、シドニー、アテネの大会出場、そして27年ぶりのパラリンピック出場など、熱のこもった2時間半の講演、感動しました。

松本さんは、パラリンピックの創始者と言われるイギリスのグットマン博士の「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」という言葉が印象に残っているということでした。まさにそうだと思います。中途障害者は病気等で失った機能により、できなくなったことを失望し、自死する人もいると言われています。いつまでも失ったものについてこだわらず、残っている機能をどのように使うかが大事ではないかということを指摘している言葉だと思います。

視覚障害者は情報量が少ないために、駅のホームでの転落事故が多く起きていることも指摘されていました。

駅や町で白杖を持っている視覚障害者を見た時は、「何かお手伝いすることはありませんか」と声をかけていただくことが、事故を防ぎ、支援に繋がっていくことを強調されていました。

（信達校区　中尾　進）

【参加者の声】

◆様々な立場、境遇、経験をされてきた方々がこれまで歩んできた話を聞くことにより、「自分がその人と同じ立場ならどのように考え、行動するだろうか？」と考えるきっかけになり、ひいては人権意識につながっていくと思いました。

◆視覚障害の人には声かけをしたいと思いました。

各校区人権協でも総会を実施しました

泉南市人権啓発推進協議会は、人権の大切さについての理解と認識を深めるため、より一層地域に密着した啓発活動をおこなえるようにと設立された8つ（新家・雄信・樽井・一丘・砂川・西信達・東・信達）の校区人権啓発推進協議会からなりたっています。

今年度は各校区（一丘・東は除く）においても総会が実施され、令和3年度の事業報告・決算、令和4年度の事業計画・役員・予算が承認されました。

総会後には、人権についての見識を深める研修会を行いながら、メンバー同士での交流も図っています。

今年度は「子どもの権利に関する条例」が施行されて10年になることから「みんなで学ぼう子どもの権利～なんでやねんすごろくをとおして～」をテーマに、すごろくを通じて、子どもの権利について学び、子どもと大人の良い関係についてみんなで考えました。

子どもたちが大人に言われて「なんでやねん」と思う気持ちを表したカードを読んで「何がダメなのかわからない」や「私も子どもの頃イヤだった」と様々な意見が交わされ、有意義な時間となりました。

憲法週間&男女共同参画週間
市民の集い

6月12日（日）文化ホールにおいて、2022憲法週間＆男女共同参画週間「市民の集い」を行いました。第一部では、世界人権問題研究センター登録研究員の源淳子さんの講演、第二部では、日本で初めて女性医師となった荻野吟子の生涯を描いた映画「一粒の麦　荻野吟子の生涯」を上映しました。参加した編集員の感想です。

映画を見るまで名前すら知らなかった。

女性が世に出て活動する等考えられなかった江戸～明治時代。結婚した相手に性病を移され、子を産めぬ体になった経験を、離婚後、学習して３４歳（明治１７年）で、日本初の女医になった。この時代、女性は医師の世界から完全に締め出されていた。故に罹患した女性達は男性医師に、身体を晒すのを避けて放置し、亡くなることが多かった。女医誕生で、多くの女性患者が助けられた。また、精神的にも助ける為に、キリスト教を学び、安楽を世に示したり、女性の為の社会活動を活発に行った。１３歳年下の津田塾の津田梅子のことは、学校等で学んだが、初めて彼女の存在・活動を知り、大きな感動と、学びを頂いた作品で在りました。

（西信達校区　東　佑吉）

映画「一粒の麦」は近代日本初の女性医師・荻野吟子の苦難に満ちた生涯を描いた作品である。吟子が亡くなってから１００年以上経った今も状況は変わっておらず、医学部入試で女子や多浪受験生を不当に低く採点した複数の大学が厳しい批判を浴びた事件も記憶に新しい。

欧米では１９８０年代以降、企業の内部昇進などで女性や黒人に対する見えない障壁（バリア）の問題が「ガラスの天井」の名で広く知られる事となった。戦後７０余年を経た日本だが、医学部不正入試などは氷山の一角、あらゆる分野で旧態依然のバリアがあり、諸外国から、「（見えているのに放ったらかしにしている）鉛の天井」と揶揄されている。このバリアを突き破った7人の女性を紹介した本「日本の天井」も広く読まれているとは言えない。

一方ここ数年、スポーツや文化学術面で「天井」を突き破る動きがある。

きずな新聞第１６号（２０１９年５月発行）でその活躍を紹介した競馬騎手の藤田菜七子さん、彼女に憧れてJRA（日本中央競馬会）やNRA（地方競馬全国協会）で女性騎手が続々誕生、中でも今年3月にJRAデビューした今村聖奈さんは、新人ながら半年足らずで３０勝を挙げ、競馬関係者から『武豊や福永祐一と成長曲線が似ている』と高く評価されている。怪我などのアクシデントがなければ、近い将来日本を代表し世界で通用する騎手になるだろう。

将棋の世界では、現在女流棋士五冠の里見香奈さんが棋士編入試験を受けている。合格すれば、「東大合格よりもはるかに難しい」と言われ、引退者や故人を含めても約３３０名しかいないプロの将棋棋士四段に女性として初めて昇段する事になる。

学術面に目を向けると、２０２０年に武庫川女子大学が建築学部を開設したのを皮切りに、我が国を代表する国立２校、奈良女子が今年工学部を開設、お茶の水女子が２０２４年に共創工学部を開設予定している。この流れは長く男性社会の象徴とされていた土木建築や機械工業の分野で、①既にある全国工学部の女子学生を含め、毎年数百～千人単位で女性エンジニアの卵が巣立つ事、②女子の在籍率が１割前後、肩身の狭い思いをしながら過ごした男女共学の工学部ではなく、全員女性の工学部～大学院修士課程を修了した彼女たちがめざすのは、男性目線の車や建物ではなく、「私が考えた、誰にでも使いやすく環境に優しい」物になる事、③彼女たちを受け入れる業界の対応や体制が劇的に変わる、否、変わらざるを得ない事、を意味する。

現在62才、将棋と競馬をこよなく愛する私は、「ガラスの天井」や「日本の天井」が、「前世紀の遺物」と成り果てる様を、この目でしっかり見届けたい。

（西信達校区　柿本　繁雄）

西信達小学校 「自分らしく生きる」

講師：真道ゴーさん（元プロボクシング選手）

子ども達から感想をいただきました。

◆「人を大切にする」ということや「自分らしく生きる」というのがわたしは一番心にグッときて感動しました。男でも女でもなかよくしたらいいと思う。（4年生）

◆ぼくの思ったことはときどき自分は人とは違うなとか思っちゃうときがあるけど、真道ゴーさんの話を聞いて、自分は人とはちがってもそれは自分らしく生きているしょうこなんだとおもって、自分は人とはちがうからダメって自分を責める必要ないんだと思いました。（5年生）

◆自分にしかしらないなやみ、つらさを友達・親にも言えないつらさが聞いていて、世界にはいろんなつらさをしっている人がいるんだと思い、見た目が女・男だからこうしなさいとかではなくてちゃんとなかみを見てほしいとますます思いました。（6年生）

先生からも感想をいただきました。

◆「苦しいこと・辛いことがあるからこそ、幸せを感じられる」という言葉が心に残りました。日々の勉強や運動でも、しんどかったけどやってよかった！と喜びを感じられるようサポートしていきたいです。また、男だから、女だから・・・ではなく、誰もが自分らしく生きられるよう一人ひとりを大切にしたクラスをつくっていきたいと改めて思いました。

信達校区の集いでは「命の大切さと平和の尊さ」について劇を通じて学び、エイサーなどの沖縄文化について触れる機会となりました。樽井校区の集いでは「SNSとの上手な付き合い方」について、講師の作成した教材を基にわかりやすくお話していただきました。西信達校区の集いでは「LGBTQ」をテーマに、当事者と出会いお話を聴くことで、自分らしさについて考えました。雄信校区の集いでは「夢をもつことの大切さ」を、夢をあきらめないことで達成した世界レベルのジャグリングパフォーマンスを交えてお話いただきました。

雄信小学校 「あきらめない心」

講師：ちゃんへん．さん（ジャグリングパフォーマー）

子ども達から感想をいただきました。

◆話を聞いて心に残ったのは、（ちゃんへんさんが）おじいちゃんにお礼を言えなかったことです。

ぼくもひいおばあちゃんがなくなった時に、お礼とか言えなくてさみしかったです。なのですごくこの気持ちがわかります。それで、歌をつくってすごいと思いました。ぼくは、この人はつらい思いをしているんだなぁと思いました。

◆私はちゃんへんさんがおじいさんの話をしてくれたとき、私が生まれる前に病気で死んだおじいさんを思い出しました。どんな人かはわからないけど、いい人だったと聞いてあってみたかったと思いました。

ちゃんへんさんのわざや歌が心に残りました。いじめられていたのは、3年生くらいのころに来てくれた落語の人と同じだなあと思いました。

◆本当に外国人せん用の学校やまちがあるなんて知らなかったです。そのようなまちがあるなら、一度行ってみたいです。人権とは、人を助け合うというものだと思いました。

◆なんで自分と生まれた土地や言葉・はだの色がちがうだけで、さべつやいじめをするんだろう。同じ人間で、苦しい思いをしてるかもしれないのに。

信達小学校 「沖縄の“命どぅ宝”を学ぼう～エイサーとともに～」

講師:「月桃の花」歌舞団

5年生と6年生の子ども達から感想をいただきました。

◆命こそあれば楽しいことはぜったいにあると思います。わたしは、命は本当のたからものという心をもって人生を楽しもうと思います。（5年生）

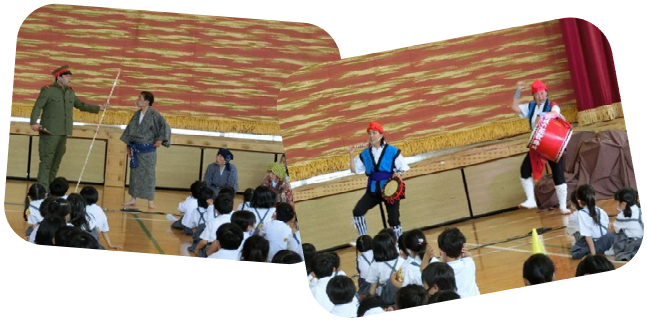
◆「戦争は命を落とすあぶない行いだ。戦争はとても悲しいこと、そしてとてもこわいもの」だと思った。（5年生）

◆「月桃の花歌舞団」さんのパフォーマンスを見て、命は本当に大切なものだと思いました。戦争のげきや演奏を見て、命があるから「月桃の花歌舞団」さんのパフォーマンスが見れたり楽しいことが出来るということを学びました。（5年生）

◆劇で人々が理不尽に殺されてしまうところを見て、今、私たちが平和に暮らすことができているだけでもとてもありがたいんだなぁと思いました。（6年生）

◆命の大切さを家族やそれを知らない人に伝えようと思いました。（6年生）

◆欠けてもいい命なんて一つもない。人の思いとか簡単に死にたいだなんて、死にたくない人に対してしつれい。（6年生）



校区の集い

校区人権協では、小学校やPTAと連携し、地域の子どもから大人まで幅広い世代が人権に触れ合う機会を提供しています。新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、対象学年を制限したり、地域の方々の入場制限などを行いながらではありますが、今年度も引き続き行うことができました。参加した子ども・先生・保護者の声をご紹介します。

樽井小学校 「情報モラルと人権」

講師:豊田充崇さん（和歌山大学教授）

初の試み☆
子ども達と保護者たちは別々の教室に集まり、オンラインで講演を聞きました。

保護者の方から感想をいただきました。

今どきの児童はネット環境の中での生活が当たり前となり、1人1台の学習端末やスマホを手にしている状況下、クラスでLINEグループを作って、帰宅後会話をするということが日常的なことになっています。

今回のお話は子ども達でも分かりやすく、聞きやすかったと思いました。

周りのお母さん達からLINEでいじり・中傷・個人情報の会話で傷ついている方がいるので、私自身、子どもにどう話をすればいいのか悩んでいたのですが、今回の話をきっかけに子どもと話をしようと思います。

（樽井小学校PTA）

【その他の参加者の声】

◆子供達にわかりやすい内容でよかったと思います。「人権」というと難しく感じるが、身近な事が全て人権に関わるという事がよく説明されていて、わかりやすかったです。

◆児童たちの人権学習に追随するような人権講演会でした。こんな企画は初参加でしたが、子供たちと人権のことを共有できたと満足しました。

◆短い時間でわかりやすく説明してくださったので良かったと思います。孫とも一度話し合ってみたいと思います。

命の大切さについて考える集い

令和４年９月３日（土）、文化ホールで、「命の大切さについて考える集い」を開催しました。第一部では、北朝鮮による拉致問題をテーマにした映画「めぐみへの誓い」を上映しました。第二部では、自らも阪神淡路大震災の被災者でありながら、被災地で太鼓の激励演奏を行い、現在では太鼓演奏のプロとして活動されている木村優一さんのお話と太鼓グループ「大地の会」による太鼓演奏を披露していただきました。共催者の泉南市総合福祉センター（あいぴあ泉南）の職員の方に寄稿していただきました。

「命の大切さについて考える集い」開催への思い

〝命は大切〟。多くの人はその言葉に触れ、何度も目にしたことはあるはずだと思います。ただ抽象的な事柄が大切だと言葉で教えることは本当に難しいと思います。

例えば、

・人に親切にすることは大切

・思いやりを持つことは大切

・愛情が大切

言葉や文字で表せば伝わるのでしょうか。

言葉で何か大切なことを伝えられると、特にそれが抽象的なことになると、薄っぺらく感じるような経験をされた方も多いのではないでしょうか。

人間は感じ取った経験が力となり、頭で理解することにつながると私たちは考えました。

言葉を聞いたり読んだりして頭で理解することより、心に響く音を感じてほしい。そういう思いで今回和太鼓の演奏をお願いしました。

太鼓を打つ音は日頃も皆さまは、耳にされることがあると思います。しかし、自ら被災されご自身で経験された『木村優一さんと大地の会』の皆さんだからこそ、和太鼓の音に〝**命の大切さ**〟と〝**生きる姿勢**〟が吹き込まれていたことを、ご来場の皆様にもお伝えできたのではないかと思います。

日常の生活の中で人の思いが薄れていくことは仕方がないことだと思います。

しかしどこかで和太鼓の音に触れた時、この日皆様の中に吹き込まれた〝命の大切さ〟をもう一度心に呼び戻して感じていただけることを願っております。

〈参加者の声〉

◆とても素晴らしかったです。お話しもお上手で命の大切さ、生かされている幸せをとても感じとる事ができました。

◆太鼓を集団で演じるには、気持ちをあわせる大切さを特に感じると思います。その強いメッセージ、命の大切さを伝えること、世界の平和を願い、太鼓で繋げること。しかと、受け取りました。

◆迫力もあった、和太鼓の演奏は、とても良かったです。子どもにも見てもらいたかったです。又、このようなイベントがあれば、子どもと一緒に参加したいなと思いました。「大地」という曲とてもよかったです。地震のあとの被災者の方たちの心に響いた曲、感動しました。「命」の大切さ重みを感じました。ありがとうございました。

◆命の大切さ、生かされている幸せをとても感じとる事ができました。

今生きている私たちは、それぞれ世界にたった一人しかいない唯一無二の存在です。

しかしながら、現実に目を向けると、ロシアのウクライナに対する軍事侵攻により、人々の生活が脅かされ、子どもをはじめ、罪のない多くのかけがえのない命が失われています。

今後も、平和の大切さ、そして、命の尊さについて伝えるための啓発に取り組んでいきたいと思います。

編集後記

コロナ感染の高止まりを受け、記事に予定していたイベントの中止や延期が続出、編集会議の開催すらママならない逆風の中、どうにか21号の発刊に漕ぎ着けました。

きずな新聞は読者ひとりひとりに寄り添い、泉南市人権啓発推進協議会が開催するさまざまなイベントや研修・講演・講座とリンクする参加体験型の新聞でありたいと思っています。編集会議（企画実行委員会）の見学や参加はいつでもどなたでも大歓迎、皆さんの意見や考えを紙面で活字化し、一緒にイベントの企画をしませんか？

開催日時など、問合わせは欄外の連絡先まで。

（編集委員）